

第1章 反日のエロス



要塞化が進む竹島。おぞましい建築物はまるで島に装置されたコンクリートの真鍮帯だ。反日エロスの象徴である。

◎日韓関係とSM共存

ある手紙

ある妙齢の婦人からお手紙をもらいました。とはいっても、私がフリーの編集者としてSM系マニア雑誌の制作に携わっていたときのことですから、25年も前の話になります。

水仙の柄のすかしの入った水色の封筒にある差出人の下の名前は「寿美子」。おそらくは変名で、彼女のパートナーがつけたものでしょう。封を開けると、手紙の他に数葉の写真が同封されていました。写真の一枚目を見ると、なるほど、「寿美子」という古風な名前が似合いそうな色白の瓜実顔の和風美人が寂しげな笑みをたたえています。そして二枚目の写真。私は思わず息を呑みました。画面いっぱいに広がる彼女のなで肩の白い背中の中、右ほぼ中央に、紅鮭色のシミズが大きく這っていて、それはかろうじて人のイニシャルであることがわかります。彼女の「ご主人様」が手ずから針の先で彫り上げた所有の刻印です。

案の定、手紙には、「寿美子」とさんとパートナーの密室でのさまざま儀式の様子がこと細かく記されていました。それによると、彼女の「ご主人様」……イニシャルでいえばK・T氏（以下ミスターK）は、彼女を他の男に抱かせ、その狂おしい嫉妬の情念を愛欲に変えるタイプのサディストのようでした。このタイプの性癖の持ち主は決して珍しいものではなく、たとえば、『O嬢の物語』で、Oを禁断の館へ誘う恋人ルネがそうです。もともと当のミスターKからは、「わしはステファン卿の方じゃ」と言われるかもしれないんですが、のちほど触れる「小口末吉の妻」事件は、この性癖が極端な形で現れた特異例といえます。他に、金属製の貞操帯や当時はまだ珍しかった性器ピアスをつけた「寿美子」さんの写真もありました。「寿美子」さんが他の男に抱かれるたびに、K氏は「おしおき」を兼ねて、彼女の白魚のような体に何かしら所有の印を残すのだそうです。

竹島の哀れな姿

ここで話は急に変わります。

あれだけマスコミが騒ぎ立てていた韓流ブームなるものが終焉し、それと同時に、まるでピールの栓を抜いたかのように一気に噴出したのが、日本人の嫌韓感情です。

その火つけ役となったのが、李明博韓国大統領（当時）でした。李氏は政権末期の2012年（平成24年）8月10日、現役の大統領として初めて竹島に上陸、返す刀で8月14日には、「日王（天皇）が訪韓したければ、独立運動家の墓の前に土下座しろ」と発言、これに対し多

くの日本人の怒りが爆発、たちまち臨界点を越え、あちらこちらで核分裂を始めたのです。知人で韓流タレント雑誌を出している某出版社の営業部長も「あれ（李氏の竹島上陸）以来、雑誌の売れ行きがめっきり落ちた」と肩を落としていました。韓流の聖地と呼ばれた新大久保は閑古鳥が鳴き、TVからは韓国タレントの姿が消えました。

竹島の岩肌を削り「韓国領」と大きく彫られた文字を撫でさせる李大統領の姿を記憶している読者も多いことかと思えます。私は、あの「韓国領」の文字を見るたびに、「寿美子」さんの背中に踊るケロイド状のK・Tのインシヤルを思い出さずにいられないのです。

韓国では竹島のことを独島（ドクト）と呼びます。韓国人は「独島愛」という言葉が大好きです。そんなに愛してやまないはずの「独島」の岩肌に文字を刻み込み永遠に修復不可能な傷跡を残すことの意味が、今ひとつよくわかりません。岩肌の文字だけでは飽き足らず、韓国は竹島にヘリポートや船着場を作り、武装警官を常駐させ、さらに観光用のロープウェイを引き、この後、ホテルや発電施設の建設も予定されているとか。明らかに日本に対する示威行為ですが、島の景観や環境の保全などどうでもいいということらしい。これが彼らのいう「独島愛」の実態なのです。私には、あの小さな島に次々と建てられるコンクリートの建造物が、まるでサデイストの愛人の眸によってほどこされた貞操帯や性器ピアスの類にさえ見えてくるのです。

「独島」妻」論の奇怪さ

日本は竹島の領有権に関してこれまで何度もハーグの国際司法裁判所での決着を打診してきましたが、韓国側はこれを拒否し続け今日まできています。2004年（平成16年）1月の記者会見で、盧武鉉大統領（当時）は「独島が韓国領であることを証明しろ？ 私が私の妻をなぜ他人に向かって証明しなければならぬんだ」と発言し、改めて国際司法裁判所への出廷の意思がないことを明らかにしました。

なんだか子供の屁理屈のようですが、冷静になって考えれば、この「私の妻」という比喩自体、日本人の感覚からすればちよつと異様な響きがあるのも確かです。

実は「独島（竹島）」妻」論は、盧武鉉が元祖でなく、およそ45年も前、第6回国会外務委員会で当時の李東元外務部長官が持ち出したのが最初だといわれています。李氏の発言時、野党の一議員だった金大中氏（のちの第15代大統領）は、「長官の発言としては品位に欠ける」としながらも、「あえてその喩えを使わせてもらうなら、見知らぬ男が私の妻を自分の妻と主張するようなことがあれば警告して怒鳴るべきことではないか」と述べたといわれています。金氏も「独島」妻」論の信奉者だったようです。

また、漢陽大学の慎鋪廈碩座教授（当時）（註・寄付金で研究活動をするよう大学が指定した教授）も「もし、戸籍上に登録された自分の妻を、隣の家のお首相が自分の妻だと世界に妄言

をするとすれば、そのつど、『その主張は妄言であり、彼女は私の妻だ』と主張するのが正しい」(朝鮮日報2004年1月15日付)と同様の発言を残しています。

政治家や学者だけではありません。『殴り殺される覚悟で書いた親日宣言』(講談社)の著書で知られるタレントの趙英男氏(チョウヨンナム)は竹島問題に触れ、聯合ニュースのインタビュアー(2005年4月25日)にこう答えています。「もし、自分の妻に対して誰かが『私の妻だ』と主張をしたとしよう。この場合、二通りの反応があるはずだ。1つは『気でも狂ったのではないか』と無視してしまう人、そして、そいつを叩きのめす人。私は無視してしまうタイプだ」。

これらからわかるように、「独島」妻」は、韓国ではわりとポピュラーな表現なのです。最近でいえば、東亜日報(2013年2月23日付)が社説で、同月22日、島根県で行われた「竹島の日」の式典に島尻安伊子内閣府政務官(次官級)が政府代表として出席したことを受け、「独島は、韓国人にとって、ただの小さな無人島ではなく、苦しい植民支配の胸の痛い象徴であり、忘れたくない歴史の序幕に登場する忘れることのできない恋人のような存在だ」という言葉で日本政府を非難していたのが印象的でした。妻も恋人も意味するところは同じでしょう。

独島(竹島) || 「私の妻」であるならば、その竹島の領有を主張する日本は、韓国からすれば、妻を寝取ろうと狙っている不埒な隣家の男ということになります。男性にとって自分の女房を他の男に奪われることほど屈辱的なものはありません。儒教的男性原理社会にあり、今なお姦通罪が存在する韓国においてはさらに強烈な意味があるかと思えます。

トリオリズムとは

愛する(あるいは崇拜の対象である)女性が第三者と関係することを夢想したり、三角関係の嫉妬に身を焦がすことを悦びとする、あるいは、自分と恋人(妻)の関係に第三者の男を引き込もうとする男性マゾヒズムの類型を「トリオリズム」(Triorism)といいます。

谷崎潤一郎やザッヘル・マゾツホの作品の根幹をなす要素です。谷崎作品では『鍵』、『痴人の愛』、『蓼食う蟲』などが挙げられますし、マゾツホの『毛皮を着たヴィーナス』はまさにこれです。実際、谷崎はよく知られているように、最初の夫人である千代夫人を介して親友の佐藤春夫とトリオリズムの関係にありました。意外な作品では、ツルゲーネフの『初恋』もこのカテゴリーに入れていいかもしれません。主人公と崇拜対象の女性、主人公の父親のトライアングルな関係が描かれているのですが、それぞれが支配と従属という縦糸で結ばれている点で、SM的な視点で読み解くことのできる作品です。

また、芥川龍之介の『藪の中』はトリオリズムを語る上で貴重なテキストかと思われます。盗賊が夫の目の前でその妻を陵辱するという衝撃的なシークエンスを軸に、事件の細部に關して盗賊、夫の死霊、妻の証言がそれぞれ食い違い矛盾し合い、真相は読者にもわからないという内的多元焦点化の構成を取っています。それぞれの証言を並列に扱っているため、他人の妻を犯すサディズムの視点、妻が目前で第三者によって陵辱されるというマゾヒズムの視点、さ

らに、犯される人妻の視点が用意されており、それぞれに感情移入が可能です。ちなみにSM小説の大御所・団鬼六氏はこの『藪の中』を自身の原風景的作品に挙げています。

トリオリズムを教義とする韓国キリスト教カルト

統一教会（世界基督教統一神霊協会）といえば、靈感商法や集団結婚式などでたびたびマスコミを騒がせる代表的な韓国キリスト教カルトですが、同教団の教義に興味深いものを見つけました。以下、簡単に説明します。

《人類始祖、アダムとエバ（イヴ）は、それぞれが人間的に十分な成熟をし、個性を完成させたあと、神が定めた時に結婚して夫婦となり、子女を産み増やし、神の愛に包まれた家庭を築くべきであった。それなのにエバは、サタンの化身である蛇の誘いによって、サタンと淫行を行った。その後エバとアダムは、時ならぬ時に淫行を犯し、それが罪の根、原罪となった。それによってサタンの血が受け継がれ、その罪は、人類歴史上とぎれることなく綿々と流れてきている。》

これが、統一教会が聖典とする「原理講論」における〈墮落論〉です。言うまでもなく、旧約聖書の創世記のエデンの下りの、統一協会流の翻案です。創世記では蛇にそそのかされたイヴが「善悪を知る木の実」を食べるのですが、統一教会の教義ではイヴ（エバ）が蛇と性交するという、かなり淫猥な話にすり替わっています。つまり、アダムは蛇（サタン）に妻を「寝取られた」わけで、この教義の根本をなすのはトリオリズムです。

このあとの教団の秘密教義では、原罪で穢れた血を清め、祝福にいたるために「血統転換」が必要だと説くとされています。「血統転換」とは「血分け」とも呼ばれ、要するに教祖・文鮮明との性交を意味するのです。統一教会の名物（？）の合同結婚式は、いわばマス化、簡略化された「血分け」儀式ともいえます。この「血分け」という発想自体は決して文鮮明のオリジナルではなく、一般に混淫派と呼ばれる異端キリスト教諸派に伝わるもので、文鮮明は若いころ、その一派である金百文率いるイスラエル修道院に半年間所属し、そこから教義の多くをコピーし、統一教会を興しました。

統一教会の分派である禹明植の禹グループは、原罪論をさらに発展させ、「カインがアベルを殺害したのは、アベルがカインの妻と関係してメシアを生もうとしていた実体的血統転換の現場を見て、それに激怒したから」「ノアがハムの妻と関係してメシアを生もうとしていたのに、それにハムが怒った」などと説いているそうですから、韓国キリスト教の「寝取られ」コンプレックスも根が深いものがありそうです。

さて、統一教会の教義ですが、これから面白い（？）ところで、彼らのいうアダムとエバの関係は、そのまま韓国と日本の関係に投影されるのです。韓国Ⅱアダムの国、日本Ⅱエバの

国という主張です。すなわち日本は不貞を働いた妻ということになり、この不貞はそのまま日韓併合という「原罪」に投影され、「罪深き妻エバ」日本は、寛容なる夫アダム「韓国に懺悔し、尽くす義務がある」と説くのです。その義務のひとつとして、金銭と労働力の徹底した提供があります。日本人信者はどの国の信者よりも多くの献金を教団に収めなければいけないといっています。また、日本がエバの国である根拠のひとつに、天照大神という「女神」を崇拜しているということ挙げようです。

この、徹底した男性原理主義と二元論は、キリスト教というよりも韓国の精神文化に深く根を張る朱子学の彼らなりの解釈とみていいでしょう。統一教会に限らず韓国のキリスト教は、朱子学と土着のシャーマニズムと密接な関わりがあります。キリスト教（プロテスタント長老派）が、韓国に根を下ろす際、土着のシャーマニズムを取り込んだのです。イザヤ・ベンダサン（山本七平）は、「キリスト教も日本に来れば日本教になる」と言いましたが、韓国ではキリスト教は日本以上の変質を遂げローカライズされてしまったとみるべきで、韓国のキリスト教団のほとんどすべては、カルトと断言してかまいません。

先ほどの「独島」論では、「妻（竹島）を寝取る相手」が日本でした。統一教会を始めとする混淫派の教義では、日本は「不貞を働いた妻」に立場が変わりますが、いずれにしても韓国は「寝取られ夫」という屈辱的な役回りを好んで演じているということになります。

「サディスト」であることを自虐するマゾヒスト？

「日韓の歴史を克服し友好を推進する会」なる韓国在住の日本人女性グループが存在します。和服に身を包み、韓国の主要都市で定期的に、「慰安婦など「日帝の蛮行」をお詫びする土下座パフォーマンスを披露すること」で有名で、日本のメディアでも何度か取り上げられました。この会の正体は集団結婚で韓国に渡った統一教会信者の日本妻たちの集まりだそうです。文鮮明の教えを信じ、法外な献金の果て、親兄弟とも半ば絶縁同然で海を渡り嫁いだ先で、彼女たちはこんなことまでさせられているのです。マインドコントロール下にある本人たちはどう思っているのかは知りませんが、私から見れば、これは立派な羞恥プレイに他なりません。

自虐好きの日本は韓国に対しては、基本的にマゾヒストと見ていいでしょう。この日本人の多くにこびりついた情緒をマゾヒスト・ジャパンと仮称します。

ところがです。韓国人が日本を非難するときに彼らの口から出る「日本人」像はマゾヒストどころか、極めてサディスティックな人格の持ち主なようです。

彼らがいう「日本人」は——「朝鮮の国母である王妃（閔妃）を殺し、遺体を多数で陵辱した後、火をつけ」、「20万人もの無垢な乙女を誘拐し、強姦して軍隊の性奴隷にし」、「独立運動家を不当逮捕し、取り調べという名目で、生爪をはぐ、逆さに吊るしてやかんで鼻の穴に塩水を流し込む、などの熾烈な拷問を加える」ような人格です。このような、韓国人のフィルター

を通して作られた悪魔のような「日本人」像をサディスト・ジャパンと仮称します。

忘れてはいけないのが、韓国が歴史問題等で日本を非難するためには「日本人」≠サディストでなければならぬということです。韓国が日本を非難すればするほど、「日本人」のサディズム性が拡大され、今では、ナンセンスなまでに誇張されたサディスト・ジャパン像が、彼らの口や筆によって世界に喧伝ウツタされています。さらに面白いのは、彼らのこのサディスト・ジャパン像を肯定してやまない日本人がいるということです。その多くは、リベラルを自称するインテリたちであります。彼らの主張を聞けば、日本は朝鮮で「国母である王妃を殺し」、「20万人もの無垢な乙女を性奴隷にし」等の酷いひどことをしたのだから、謝罪と賠償をしなければならぬということらしいのです。この手の人たちは、「私はサディストです。ごめんさい」と許しを乞うマゾヒストという、なかなか倒錯した心理状況にあります。

寝取られ、コンプレックスと慰安婦問題

私は、慰安婦問題は、すっきりした形で解決することはないと断言します。いわゆる慰安婦がキャン・フオロワー（追軍売春婦）でしかないという決定的証拠が出てきても、韓国はそれを認めることはないでしょうし、そんなものなかつたかのように日本非難、謝罪と賠償の要

求を続けてくるはずで、彼らが認めない以上、完全解決は成り立ちません。

慰安婦問題ほど、韓国人の「寝取られ、コンプレックスを刺激してやまないイシュー」はないのですから、ゆえに韓国がこの屈折した快感を放棄することはないと思うのです。

「日帝はわが民族の少女20万人を性奴隷にした」という彼らの対日非難の言葉は、「われわれは、同族の少女20万人を日本に寝取られた」と翻訳可能です。「われわれは日本に同族少女を20万人誘拐されながら、暴動ひとつ起こすことなくただ見ていた」と意識もできます。これだけ見ると、韓国人もかなりマゾヒスティックな性格の持ち主といえます。韓国が世界中に建てようとしていた慰安婦少女像、あれなども「韓国は日本に女を寝取られた」と書かれた記念碑を建てるようなものかもしれません。

少し、整理してみましよう。

韓国は歴史問題等でサディスティックに日本を非難することで同時にマゾヒスティックな感情も満足させている。両者は正比例の関係にあるとわかっていいと思います。日本に対してサディズムをむき出しにすればするほど、彼らのマゾヒズム的快感が増幅されるのです。一方、日本は韓国の非難にマゾヒスティックに頭を垂れば垂れるほど、サディストである自分を自覚していくというわけになります。

韓国は、通常はサディストの顔を前面に出してしながら、その裏側にマゾヒストの資質を隠している「仮面性マゾのサディスト」だと思われれます。日本は、そのほぼ逆で、通常はマゾヒ

ストでサディストの資質が裏側に隠れている「仮面性サドのマゾヒスト」です。仮面マゾのサディストと仮面サドのマゾヒストのもたれ合いの関係が、すなわち今日の日韓関係です。このもたれ合いこそが歴史問題をこれほどややこしくさせてきた元凶といえます。

言ってみれば、この関係、相手のSの部分には己のMの部分が、相手のMの部分には己のSの部分がありとはまってしまうのですから、単なるS↓Mよりも関係は抜き差しならぬものになってくるのは当然です。私はこれをSM共依存の関係と呼びます。

変態の世界では、こういうパートナーを見つけてしまったマニアは、幸福といいたまうか不幸といいたまうか、あるいはこれこそ業と諦めるか、それほどすさまじいまでの密な関係性が構築されていきます。

冒頭紹介した、「寿美子」さんとミスターKの関係はまさにこれです。

SM共依存の果ての「小口末吉の妻」事件

それでも「寿美子」さんとミスターKは、意識してプレイしているぶん、まだどこかブレキは利いています。無意識のあまり知らずのうちに官能の泥沼に身を沈め、結果破滅に向かうこともあるのが、このSM共依存の恐ろしいところです。

1917年（大正6年）の「小口末吉の妻」事件がまさにそれでした。下谷区龍泉寺町の大工・小口末吉が内縁の妻である矢作ヨネを折檻死させた事件です。ヨネは多情で浮気症な女でした。浮気をして帰ってきては、怒る夫に詫言を入れ、思う存分責め苛んでくれと哀願するという強度のマゾヒストでもありました。浮気は折檻を引き出すための口実だったのです。

一方の末吉は精神鑑定によれば、「性格は愚鈍で、判断力は普通人より乏しく、ヨネに引きずられる形で、二人だけの愛欲地獄へとまっぴらいきます。最初は殴るだけでしたが、折檻はすぐにエスカレートしていきました。ある日、ヨネは「浮気の出来ない体にして欲しい」と末吉に懇願します。背中に焼け火箸で「小口末吉の妻」と書いてくれというのです。その「作業」が行われている最中、ヨネは手ぬぐいを銜え、額に脂汗をにじませながらも、決してうめき声は挙げなかつたそうです。苦勞してできた刻印も、ヨネがいちいち鏡に映しては、形が悪い、この位置だと腕を下げると読めないから、今度は腕を下げたままの状態に入れて欲しい、と何度も夫にリテイクを要求するのだそうです。末吉もそれに応じてやります。

こうして、日々エスカレートする折檻の果てに、ヨネは衰弱死してしまふのです。ヨネの遺体は、それはすさまじい状態だったといえます。臀部や大腿部に222箇所、陰部にも左右3箇所ずつの傷が並んでいました。背中和右腕の3箇所に焼け火箸で「小口末吉妻 大正六年」と記され、胸は塩酸をかけられ焼け爛れていました。塩酸を手に入れるため、ヨネは化学の学生とも密通をしていたといえます。左足の薬指、右足の中指と小指が欠損し、左手の薬指と小

指も第二関節から切断されていました。指を切断した道具は末吉の商売道具のノミでした。ヨネは真性のマゾヒストであり、同時に浮気をして亭主が苦しむのを楽しむサディストでもありました。末吉も、ヨネの巧みな誘導にのりながら、嫉妬（マゾヒズム）の炎をサディズムに変換させる術を覚えていきました。こうして二人、いつしか、出口のない世界に足を踏み入れて行ったのです。

個人の関係において、いかなる性癖が介在していても、それが社会秩序を毀損きそんしない限り許されるべきことであると私は考えます。しかし、国家と国家の関係がこうであっては困ります。なぜなら、日本はわれわれだけではなく子孫のものでもあるからです。隣国との関係が精神的にアブノーマルな関係のまま、この国を子孫に引き渡すわけにはいかないと考えるからです。私は日本という国を、小口末吉にたくありませんし、矢作ヨネにもたくありません。韓国にも同様の思いを持っています。

では、この不健全で異常アブノーマルな関係から解放されるにはどうしたらいいのでしょうか。なかなか難しい質問です。それほど、共依存というものは厄介なものなのです。しかし、ものごとは何でも最初の一步があります。この問題もわかりやすいです。

まず、変態であることを自覚することなのです。

反日のポルノ作用

ナナムの家の奇怪さ

韓国京畿道広州市退村面源當里に「ナナムの家」があります。ここは、かつて日本軍の慰安婦であった老女たちがボランティア・スタッフと共同生活をする施設として、日本のマスコミでもたびたび紹介されているのでご存知の読者も多いことでしょう。年間1万人の来訪者があり、うち約半数が日本人なのだそうです。

同施設は、主に老女たちの居住用建物と併設する歴史資料館（野外展示用スペース含む）からなっていて、資料館には日本軍の慰安所も再現されており、陸軍使用のコンドーム（突撃一番）なども資料として展示されているとのこと。日本から来た修学旅行生は、元慰安婦のおばあさんたちと対面後、この資料館を見学させられます。三畳ほどの薄暗いスペースにくくりつけの木のベッド——自分たちを笑顔で迎えてくれたおばあさんたちは、今の自分と同じ年頃るとき、こんな空間に押し込められて強制的に日本軍の性の処理をさせられていたのか——。純粋無垢な中高生ほど、受けるショックは大きいことでしょう。そして、おばあさんたちに對する贖罪感しよくざいと、自分が日本人であることのやりきれなさに胸が押しつぶされるのです。

百聞は一見にしかずといえます。一枚の絵は百万言にも勝るともいえます。ビジュアル（視覚）を通しての追体験は、確かに、ある種の「学習」に関して実に効果的なのです。

繰り返しますが、ナムムの家は元慰安婦のおばあさんが暮らす施設です。彼女たちの主張によれば、ある日突然、軍人や警察が現れ、平和に暮らしていた彼女たちを強制的に連行し各地の慰安所で売春業務に従事させていたということになります。それが事実であるなら、なるほどおぞましい人権侵害として人類史に記録されるべきものです。

私は男ですが、もし自分が女性で、そのような境遇に落とされた経験を持つ身であったとしたら、残りの人生をどのような思いで過ごしていただろうかと何度も考えました。答えは見つかりません。少なくとも、死ぬまでその辛い過去について口にするのもないと思うし、できれば記憶からも抹消したいと切に願うことでしよう。

ところがです、当のナムムの家では、わざわざ「おばあさんたちを性奴隷にした」空間を住まいの隣に再現し、その辛く屈辱的なのはずの体験を記憶の奥底からプレイバックさせようというのですから、考えようによってはこれほど残酷な仕打ちはありません。しかも入場料（3000〜5000ウォン）を取って見世物にしているのです。たとえば、レイプ被害にあった女性に、「あなたのような被害者を二度と出さないよう、この事件を語りつぐためにも、あなたが連れ込まれ強姦された部屋をお宅の隣に再現してみんなに見てもらいましょう」などと持ちかける人間がいたとしたら、あなたはその人間の神経をどう思うでしょうか。

日本の政治家や識者が、慰安婦の強制連行問題に懐疑的な立場の発言をすると、韓国のマスコミは「おばあさんたちの傷口に塩を擦り込む行為だ」と一斉に批判しますが、ナムムの家では、塩どころか酢やタバスコまで毎日毎日、それこそ丁寧に擦り込んでいるといっても差し支えありません。少なくとも冷静な目にはそう映るはずです。

西大門刑務所の謎

ナムムの家と並んで韓国における反日教育（日本人修学旅行生にとっては自虐教育）のメッカのひとつとなっているのが、ソウルの西大門刑務所歴史館です。ここは併合時代に建てられた朝鮮半島初の近代的刑務所として知られ、韓国の「歴史認識」によれば、独立運動家を多く収監し、官憲による容赦ない拷問が加えられた場所とされており、同刑務所で非業の死を遂げた独立運動家は50万人に及ぶそうです。

現在は歴史館として開放され、韓国では中高生の課外学習の定番コースになっています。地階には等身大の人形によって再現された拷問の様子が展示され、水責め、火責め、鞭打ちなど、その凄惨な描写に、中高生の見学者の中には泣き出したり失神する者さえいるとのこと。

とはいえ、展示物の中に日本統治時代には使われたことのない李朝時代の拷問器具があった

りと、この歴史館も冷静な目で分析すれば、怪しいことだらけなのです。同刑務所は戦後も韓国政府に引き継がれ使用されており、軍事政権下では民主運動家が数多く収容されています。日帝の拷問として紹介されている、狭い箱のような個室に閉じ込め常に腰をかがめた状態で生活させるという拷問は実はこの軍事政権下でよく行われたものなのです。李朝時代や軍政時代の非人道的な拷問や処刑までもが、日本の仕業にさせられているのですから日本人からすれば、たまったものではありません。

そもそも、獄死した独立運動家が50万人というのはどのデータを元にした数字なのでしょう。50万人といえば、大東亜戦争の激戦区でもあったフィリピンでの日本軍の戦死者数と同数です。太平洋戦線でのアメリカ兵の全戦死者は49万5千人強といわれています。それだけの数の獄死者が出た、言葉を変えらるなら、それだけの数の、投獄も死もいとわぬ勇敢無比な独立運動志士が当時の朝鮮半島にいたというなら、総督府に対しゲリラ戦をいどむことだって容易だったはずです。第一、仲間を不当に収監されたとき、残りの運動家たちは何をやっていったのか。奪還に向けて一斉蜂起を計画する者は皆無だったのでしょうか。ちなみにフランス革命前夜、バスティーユ牢獄を包囲した群集は2万人でした。当時のパリの全人口は60万人といわれています。

一人の死刑者もいなかった三一事件

併合時代最大の民衆蜂起は言うまでもなく1919年(大正8年)の三一万歳事件で、のべ205万人がデモに参加しています。この騒乱では、1万2000人近い朝鮮人が検挙されていますが、そのうち4000人が不起訴になって釈放され、有罪判決を受けた者でも死刑、無期懲役、15年以上の懲役は皆無です。受刑者のうちのほとんども3年以内に仮釈放されています。被疑者全員に弁護士がつき、法に則^{のど}って厳肅に彼らは裁かれました。崔南善^{チェナムソン}ら騒乱の中心人物たちが、後年こぞって親日派となったのは、この総督府の法治精神に感動したからです。三一独立宣言文の起草者である崔は、大東亜戦争が勃発するとこれを「聖戦」と呼び、1943年(昭和18年)には、朝鮮学徒の出陣をもとめて半島中を遊説^{ゆうせい}しています。

一方、李朝時代に、反体制的な運動をすれば、九族皆殺しが当たり前でした。たとえ死刑は免れても奴婢に落とされるといふ絶望的な刑が待っていたのです。

こちらは中国の話ですが、2007年(平成19年)12月、南京大虐殺のプロパガンダ施設である南京大屠殺記念館がリニユーアル・オープンしました。ここ最大の呼び物は万人抗(日本兵が民間人を虐殺し、死体を埋めた)と中国側が主張する穴)から掘り出したという無数の人骨です。単に大量の人骨を並べただけなら、それが日本軍によってもたらされたものなのか、国民党軍によるものか、はたまた共産党軍によるものか、あるいは大躍進や文革の際の死者の

骨なのか、わかつたものではありません。そもそも、この展示自体、われわれ日本人にとっては死者への冒瀆ぼうとくに思えてしまいます。

反日のポルノ作用

われわれはこうした強烈なビジュアルを見せられると、一瞬にして思考停止状態に陥り、相手のプロパガンダを受けやすくなってしまうようです。シヨックに目の前が白くなり、まさにその初期化された真っ白い意識のキャンパスの上に、日本兵は残酷だ、酷いことをした、という印象だけがやすやすと上書きされていくのです。そうなると、たとえば、その展示物の隣に「中国の子供や婦人と親しげに笑う日本兵」の写真パネルを置いたとしても、彼の目には止まることはありません。なごやかなものや楽しげなものより、恐怖や生理的不快感の強いものが潜在意識に刻印されやすいのです。楽しい夢より怖い夢の方が目覚めたあとよく覚えているのと同じメカニズムです。

私はこれを、「反日（自虐）のポルノ作用」と呼ぶことにしています。ビジュアル情報によって意識に訴えかけるという手法はまさにポルノグラフィの構造と同じだからです。長年、成人雑誌の執筆・制作に関わってきた私には、それが体験的によくわかるのです。

ポルノでいえば当然、目に飛び込んでくるビジュアル（グラフィア）は異性の裸体やセクシーな下着姿、その他さまざまなエロティックなシチュエーションであることは言うまでもありません。その裸体、あるいは下着姿の異性に性的刺激を受けた読者は、イメージの中でその異性（モデル）と性行為を行っているはずです。異性とどこで知り合い、どのように口説き、どのようにベッドに誘うか、という現実社会では不可欠なプロセスはすべてすつ飛ばし、いきなり行為に及んでいることでしょう。いってみれば、ポルノとは、読者の「ご都合主義」に支えられたジャンルなのです。

反日プロパガンダでは、この「裸体」の役目を担うのは、無数の死体や、拷問にうめく朝鮮人、今まさに軍刀で首をはねられようとしている中国人捕虜、トラックの荷台に乗せられた慰安婦、あるいは残忍そうに笑う憲兵や軍医、などのイメージです。こういったシヨッキングな（真偽の怪しい）写真ビジュアルを目にしたとき、人の脳はある種の興奮状態にあります。その興奮状態においては、「果たして一本の軍刀で百人殺害できるのか」とか「なぜこの慰安婦たちは逃げようとしなの」といった当然の疑問は凍結され、ひたすら「ご都合主義」的な日本軍の残酷ストーリーが頭の中に再構築されるといわけです。

エロも残酷も、人間にとって本来はひとつのものなのです。おそらく、性的興奮を司る中枢と攻撃性や残酷性の興奮に関わる中枢は隣同士に位置しているのだと思います。繁殖期にメスを巡ってオス同士が闘争するのは、この二つの中枢に流れる電流が刺激しあうためです。勝

つた者がメスを独占し、より強い種を残す。メスはメスで、より強い種を求めてオス同士の戦いを積極的に誘発させる。いずれも地球の生命たちが何億年もの間繰り返してきたとなみであります。また、戦争で強姦事件が多発するのも、同様のメカニズムが作用するためと思われ

ます。

何が言いたいのかといえば、異性の裸体も「日本軍の残忍さ」も、われわれは意識下レベルでは同列に感知しているということなのです。女性の悩ましげな裸体にエロティックでグラマラスな空想を描くのと同じく、「軍医に生体解剖される中国人」や「軍刀でハルモニを脅す悪鬼の日本兵」もまた悩ましくグラマラスなアイコン（聖像）となりうるのです。

『私の戦争犯罪』の犯罪性

話を慰安婦に戻します。慰安婦の強制連行なる「神話」の最初のネタ元は、1983年（昭和58年）に出版された、吉田清治なる詐話師によるヨタ本『私の戦争犯罪・朝鮮人強制連行』（三一書房）でした。

この中で吉田は、朝鮮の済州島で慰安婦徴発隊を組織、10人の武装した兵隊と憲兵とともに、島内の工場を次々に物色し女工さんを中心に慰安婦候補をかき集め連行したと「告白」しているのです。その数、一週間の徴発で約250人。のちに著者の吉田はしんぶん赤旗（1992年1月26日付）の取材に、「昭和18、19年の2年間で千人以上の女性を慰安婦として連行した」と答えています。

以下は『私の戦争犯罪』における同島の貝ボタン工場での慰安婦狩りの描写です。

《体格の大きい娘でないと、勤まらんぞ》と山田が大声で言うと、隊員たちは笑い声をあげて、端の女工から順番に、顔とからだつきを見つけて、慰安婦向きの娘を選びはじめた。若くて大柄な娘に、山田が「前へ出る」とどなった。山田が肩を押さえて床に坐らせると、娘はからだをふるわせ声を詰まらせ、笛のような声をあげて泣きじゃくった。《大野は娘のうしろへまわって行って、家畜の牝の成熟を確かめるような目つきで、娘の腰を見て、「前へ出る」と言った。》隊員が引きずり出してきた娘の前へ、平山が近づいて行って、「そいつは妊婦だろう」と言った。隊員は娘の腹を見つめると、いきなり朝鮮服の前をまくり上げ、下ばきの腹をのぞきこんだ。娘が悲鳴をあげ、隊員は納得したのか、「お前はだめだ」とどなった。》

同様の描写はまだまだ続きます。その後、女性をトラックに押し込め連行が完了するのですが、その際にも「泣き叫び、部落中に非常な叫び声と悲鳴が上がる」ような状況だったと吉田は証言します。ところが目撃者はおろか、「部落中に響くような悲鳴」を聞いたという証言すら今に至るまで一件も報告がないというのも冷静に考えればおかしな話です。それもそのはず、すでにご承知の通り、この強制連行話のすべてはフィクションだったのです。

強制連行イメージのモデル

「私の戦争犯罪」なる本は、吉田清治という男が個人的に抱いていた朝鮮人女性に対するサディズム願望と妄想を文章にしただけの、三流SM小説に過ぎません。ところが、同書の内容が明らかな嘘であると判明したあとも、そこに描かれている「公権力と暴力で朝鮮女性を脅しトラックにつめて連行する」慰安婦狩りは、「女子挺身隊と騙して連行する」行為と並ぶ、日帝の慰安婦強制連行のイメージ・モデルとなって定着してきました。

「確かに吉田証言自体は嘘であったかもしれないが、本に書かれているような慰安婦強制連行は実際あったはず」だ、という憶測がまかり通っているのです。これは「ネッシーは嘘だったかもしれないが、ネス湖には確かに怪獣がいるはずだ」という論法に相通じるものがあります。ネス湖の怪獣やUFO、ヒマラヤの雪男にロマンを求めるのは結構ですが、日本国と日本人の名誉に関わる問題を一部の反日勢力のロマンにされてはかまいません。

産経新聞元ソウル支局長、黒田勝弘氏の著書『韓国人の歴史観』（文春新書）から引用します。

《韓国における「従軍慰安婦」イメージというのは、平和でのどかな韓国の農村にある日突然、日本の軍人たちは軍用トラックでやってきて、野原で楽しげに草花を摘んでいた可愛い少女を捕まえ、その泣き叫ぶ少女を無理やりトラックに押し込んで連れて行き、部隊では監禁、暴行

のあけく、将兵の性的なぐさみものにしたというものである。慰安婦の苦勞の人生を述べるとき、支援団体や韓国マスコミの表現は彼女らの少女時代を必ず「コッタウン、チョニヨ」（花のような娘）と表現する。》

黒田氏によれば、このイメージは、テレビ、映画のシリアス・ドラマからコメディ、バラエティ、書籍、さらには慰安婦支援募金キャンペーン番組の背景シーンにいたるまで繰り返し登場し、現在の韓国社会に浸透しているとのこと。そればかりではありません、2014年（平成26年）1月には、フランスのアングレーム国際漫画祭に、韓国側が50点に及ぶ慰安婦漫画を出展、「日本軍による慰安婦狩り」は、それまでこの問題に関心の薄かった欧州にまで広がりそうな展開を見せています。すべての元凶は吉田清治という男が書いたボルノ小説にあるのです。

「権力志向型」サドと「階級闘争型」サド

男性のサディズム妄想は、大きくわけて二つの傾向に分類できると思います。

ひとつは、力のベクトルが上から下へ向かう「順行型」、別名「権力志向型」です。この場合、サディストは、権力や腕力、財力など、異性に対する何かしらの力の優位性を保持しています。

『番町皿屋敷』の殿様と下女お菊の関係が典型的といえましょう。菊池寛の『忠直卿行状記』もこれにあたります。

今ひとつは、力のベクトルが下から上へ向かう「逆行型」で、またの名を「階級闘争型」といいます。こちらの場合、サディスト男性よりも女性が上位にあります。女主人であったり、ハイスターのクイーンであったり、高嶺の花の有名タレントであったり、鼻持ちならぬインテリ女だったり、とケースはさまざまですが、その上位の女性が、何かの拍子に下位にあるはずの男性の支配を受けるというパターンです。このタイプのサディズムの典型的な作家に梶原一騎がいます。敗戦直後、満州や北鮮で朝鮮人による邦人引揚女性に対する強姦事例があいつぎましたが、これも形を変えた「階級闘争型」サディズムといえます。

『私の戦争犯罪』には明らかな「権力志向型」サディズムの傾向が読み取れるのです。

吉田はまず、「軍隊」という権力の威を借り、「武装した兵隊と憲兵」の力を借りて、当時日本の統治下にあった济州島に乗り込み、無力な朝鮮人少女を「家畜の牝の成熟を確かめるような目つき」で品定めしたのちトラックに詰め込んで連行したと書いています。明らかに上位者の目で朝鮮人少女を見下ろしており、支配者として彼女らの生殺与奪を握る立場であることを誇示しているのです。

民族差別的な視点で書かれたこの変態小説も、「日本軍の蛮行を暴く」「戦争犯罪者の懺悔」という建前がつけば、メディアは「勇気ある告白者」ともてはやし、韓国の識者は作者を「良心的日本人」ともち上げるのですから不思議なものですね。「日本軍の蛮行」を暴いてもなく、「戦争犯罪者の懺悔」でもないことが明らかになった今、本来の変態小説として正當に評価してあげることが、泉下のボルノ作家・吉田清治氏へのたむけになるのではないかと思うのですが。

戦争カオス幻想

冷静に考えれば荒唐無稽でしかない慰安婦狩りや南京大虐殺30万人が、なぜ事実であるかのように喧伝され、半ば無批判に受け入れられてきたのでしょうか。もちろん、それを巧みに吹聴する左系学者や左系メディアが幅を利かせてきたことが大きいのですが、むしろ、「もしかしたらそういうこともありだったのかな」と思わせる心理的下地が、戦後教育によって人々の意識に出来上がっているということの方に問題があります。その下地をなすものが、「戦争カオス幻想」です。

「戦争というカオス状態においては、どんな不条理なことが起こっても不思議ではない」「戦争は狂気であるから、あらゆる犯罪が許されていたはずだ」といった思い込みです。「戦争」という語は時に「日本軍」という語に置き換えられることもあります。

確かに、戦場という極限状態においては、人間としての理性や情感といったものが後方へ押しやられる瞬間がないとは言いきれません。ベトナム参戦時の韓国兵が、その顕著な例です。しかし、兵士の誰もが野獣に先祖返りするわけではない、これも確かなことなのです。戦闘の最前線にいながら必死に理性をとどめ、あるいは理性に助けられた兵士の数の方が圧倒的に多いのです。それは数多く残された将兵たちの手記、戦場日誌が証明しています。

下手なSF作家ほど、核戦争後のカオスな未来社会の物語の舞台にしがります。どのような設定でも作りようがあるからです。われわれは知らずうちに三流SFの読者にさせられていると言っているのかもしれない。

クヒオ効果

では、どのような人が、そういったイメージ工作を受け入れやすいのでしょうか。

まずは先にも触れた、思想的にまだ固まっていない10代の純真な少年少女です。破瓜期はかきの不安定な精神状態に、ビジュアルで刷り込まれる反日（自虐）情報は、深い精神的外傷（トラウマ）となって、彼らを長く支配します。これが、日教組教師の好む平和学習なるものの正体です。生徒たちに扇情的なポルノを見せて感想文を書かせているようなもの、とでもいえば、そ

の異常性がわかるかと思えます。

もうひとつのタイプを挙げるならば、いわゆる「半端なインテリ」です。より正確に言えば、自分がインテリでリベラルだと思いついてる人、他人にそう見られたいと思っている人ということになります。朝日新聞購読層を形成する主流が彼らです。

『クヒオ大佐』（09年）という映画がありました。これは實在の有名な結婚詐欺師をモデルにした漫画を映画化したものです。モデルとなった詐欺師は、自称プリンス・ジョナサン・エリザベス・クヒオ——本名は鈴木某で、むろん日本人です。

「エリザベス女王の双子の妹の息子でハワイのカメハメハ大王の血を引くアメリカ空軍特殊部隊パイロット」という触れ込みで女性に近づき、関係を結んでは、結婚資金の名目で複数の女性から現金総額約1億円を騙し取っていました。その際には「私と結婚すれば英国王室からお祝い金5億円が贈られる」などと持ちかけていたといえます。この男、自分の外見をガイジンぽく見せるため、整形手術で鼻を高くし、髪はむろん恥毛までも金色に染め、普段から英語まじりの片言の日本語で通していたというから徹底しています。

こんな胡散臭い話に騙されるのは一体どんな女性なのかと興味もわきますが、被害女性のほとんどが、高学歴のキャリアウーマンや叩き上げの女性企業家といった、男も一目置く切れ者周囲からはしっかり者の女性たちですから、プライドが高いぶん、自分を安売りもしたくない、い

つか自分のキャリアに見合う男性との出会いを願いつつ、仕事一筋で気がつけば婚期が過ぎて、というパターンに陥りやすいのかもしれない。そんな彼女たちの前に突然現れた白馬に乗った軍服の王子さまが、クヒオ大佐なのでした。彼女たちのプライドやはかない知性が逆に通常の尺度に収まらない超スケールの嘘を受け入れてしまう心の隙、いや、余裕といつてもいいかもしれません——を作ってしまったのです。半端なインテリほど、慰安婦狩りや南京大虐殺といった荒唐無稽な話を信じ込むという不思議な現象も構造は同じです。私はこれを「クヒオ効果」と呼んでいます。

クヒオ事件で興味深いのは、被害女性の中に、クヒオこと鈴木が逮捕されたあとも、「自分が騙されていた」と認めたがらない女性が少なからずいたということでした。よほど、クヒオの囁くファンタジーが魅惑的だったのでしょうか。夢が甘美であればあるほど、その夢から覚めるのが怖くなり、現実には立ち戻ろうとすることを拒否してしまうのです。

これは結婚詐欺全体にいえることですが、実は女性の方も途中で男の話の嘘臭さに気づいていることも多いのです。たとえば、クヒオの場合、彼が見せてくれる「アメリカ合衆国発行の公文書」はすべて日本語で書かれていたといいます。当然、これはちよつとおかしいと思うところですが、ファンタジーを維持したい心理が小さなほころびを視界から消し、都合のいいように穴埋めしてしまうのです。今さら彼の嘘を認めてしまうことは、それまでの自分を全否定してしまうことになります。かくして、彼女はクヒオの語るファンタジーの世界に積極的には

まり込んで行くのです。これも「クヒオ効果」のもうひとつの特徴です。

一度、慰安婦狩りや南京大虐殺を信じてしまうと、第三者が論理的かつ科学的に、それらの虚構性について解説しても耳を貸そうとしません。むしろ、意固地になってファンタジーにしがみつこうとします。慰安婦狩りや南京大虐殺を否定することは彼らにとって自己否定になってしまうからです。「クヒオ効果」による自己情報遮断が働いているのです。

放置されるエログロ平和教育

70年代、女性を中心に世界的に大ヒットしたソフト・ポルノ・フィルムの傑作に『エマニエル夫人』がありました。監督はヴォーグ誌などで活躍したファッション・カメラマン出身のジュスト・ジャカン。『エマニエル』の成功は、ファッショナブルで洗練されたものであるなら女性もまたポルノを楽しむということの証明でもあったと思います。その後、ハーレクイン・ロマンスやシルエット・ロマンスなど、女性向けの官能恋愛小説のブームもありました。近年では女性向けのアダルト・ビデオなども密かな人気ようです。

率直に言わせてもらえば、男でも女でもポルノが嫌いな人はいないのです。官能、愛欲、背徳といったファンタジーに浸る、それはまったくもって健全な大脳活動であると思います。不

健全なのは、そういった、人々が自然にポルノを受け入れる感性を利用して、反日、侮日、自虐のエログロ・ポルノをそれとはわからぬ形で刷り込み洗脳しようという輩です。とりわけ、判断力のない少年少女に、反日ポルノ、日教組教師によるエログロ平和教育は危険過ぎます。

これまで、反日ポルノの作り手といえば、中国、韓国、そしてその共犯者である日本のエログロ平和主義者たちでしたが、近年ではこれにアメリカが精力的に加担していることに注視しなければなりません。特に映画産業。ハリウッドには確実に莫大なチャイナ・マネーが入り込んでいることでしょう。日本軍が米軍の捕虜を生きたまま食人したり、原爆投下後の広島町並みを見た主人公に「せいせいした光景だ」と言わせるシーンがあるという反日トンデモ映画『Unbroken』が女優アンジェリーナ・ジョリーの監督によって制作されました。

今後、このような反日ポルノが次々制作されることと思います。われわれは間違っていることは間違っている、嘘は嘘と、国外に向けてもっと発信する力と知恵をもたなければなりません。

◎韓国なりすましと『太陽がいつぱい』

日本なりすまし商法

韓国の「大韓貿易投資振興公社」(KOTRA)が発刊した「2009年 国家および産業ブランド報告書」によると、北米欧州でサムスン日本企業だと思っている人が約3〜4割に達しているとのことで、誇り高い韓国人を憤慨させているそうです。

そもそも、サムスンを始め韓国企業は、欧米に進出する際、広告に、力士、忍者、富士山といった、明らかに日本をイメージさせるキャラクターや意匠を積極的に使い、日本ブランドに擬態することで市場の認知を得てきました。現代自動車などはそのエンブレムからしてホンダの目をそのまま斜体しかけただけのあからさまなパクリに見えます。そこまで、日本企業のブランド・イメージに便乗して商売をおきながら、今さら、日本企業と間違えられるのは困るといってもずいぶん滑稽な話のようにも思えますが、これが韓国なのです。日本が嫌いと言いつつ、その嫌いな日本になりすまするのが彼らなのです。

韓国は極端な輸出主導型の経済構造にあります。製品を作って外国に買ってもらうことには、ただちに国の経営が立ち行かなくなってしまうのです。その韓国の主な輸出産業は何か

といえ、スマホ、家電、自動車、造船、鉄鋼といったところででしょうか。これらは韓国がもともと得意にしていた、あるいは独自に切り開いた分野ではむしろありません。日本の技術協力、あるいは技術の剽窃なくしては、産業として成立しなかったものばかりです。しかも韓国メーカーとしては日本ブランドにまぎれる形で既に開拓された市場に割り込めばよく、リスクは極めて小さくてすみます。さらに彼らにとつてラッキーだったのは、円高による日本企業の長期低迷でした。輸出不調に苦しむ日本を横目に、着実にそのシェアを奪ってきたのです。韓国の日本便乗商法は製造業に限りません。たとえば、日本の漫画が世界で人気とあれば、韓国はマンファなるジャンルをでっちあげる、J・POPが流行れば、K・POPなるものをぶつけてくる、フランス・パリ郊外でJ・P・A・Nエキスポという日本の漫画、アニメを中心としたサブカルチャーの祭典が毎年開かれ、ヨーロッパ中から来場者があると知れば、「韓国ブームも作れ」と割り込んでくる、という按配です。

さらにいえば、お得意の起源捏造——。「ソメイヨシノは濟州島原産」から「寿司は朝鮮で生まれ、明治時代に日本へ伝わった」、あるいは「日本茶道の源流は朝鮮の茶礼(サレ)」、「韓国の剣道(コムド)が日本の剣道になった」などなど。特に、最後の「コムド」のように、日本語を無理やり韓国語読みに置き換えて「本家」を主張するというのもひとつのパターンとなっています。「ユド(柔道)」に「ハップキドー(合気道)」などがこれです。

アメリカ・ロサンジェルスの名物でもある日本人街リトル・トーキョーは近年、韓国系移民の流入が激しく、今ではハンゲルの看板が立ち並ぶ、リトル・ソウルの様相を呈しています。韓国系移民からすれば、この地でゼロから韓国人街を作るより、100年の歴史があり、地元の人にも認知されている日本人街をそのまま乗っ取ってしまった方が何百倍も楽なのです。このように、日本のブランド・イメージに便乗、あるいは擬態する、日本文化のオリジンを主張する、日本になります、日本に取って代わろうとする、——こういった韓国人の一連の精神構造をどう説明したらいいでしょうか。

憧れのスターやスポーツ選手の髪型や服装を真似てみる、などということは誰でも経験があることだと思います。どんな芸術家でも出発は誰かの模倣です。人は基本的に嫌いな人間の真似はしません。好きだからその人になりたいのです。ということは、韓国もまた日本が好きだということになります。嫌いだ嫌いだといいつながら日本に憧れているのです。

福田和子事件の謎

松山ホステス殺害事件といっても「はて、どんな事件だったわけ？」と首を傾げる人でも、福田和子という名は記憶のどこかに残っているのではないのでしょうか。

1982年(昭和57年)8月、愛媛県松山市の元ホステス・福田和子(当時34歳)が同僚の

ナンバー・1ホステス(31歳)を被害者のマンションで絞殺、現金や貯金通帳を奪って逃亡した事件です。和子は全国を転々としながら、数度の整形手術で顔を変え、名前を使い分けては、警察の追っ手をかわし続けました。1997年(平成9年)7月、福井市に潜伏中、通報によって逮捕されたのは、時効成立のわずか21日前のことでした。警察が懸賞金を提示した最初の事件であり、時効成立前の97年には、TVのワイドショーなども頻繁に情報提供を呼びかけたことで当時は大いに話題になったものです。

捕まったあとも、次々と明らかになる和子の犯行後の大胆不敵な行動の数々がTVや週刊誌の格好のネタとなりました。和子は、殺害した同僚Yさんの家財道具一切を当時の愛人との密会に使っていたアパートに運び入れ、彼女の服や装飾品はむろんのこと下着まで平然と身につけていたといい、女性コメンテーターなど、和子のそんな「神経の太さ」に「信じられない」を連発していたものです。おそらく視聴者の多くも同様の感想をもったと思います。当時、私はそのこれらの報道を半ば冷めた目で見ながら、この事件の深層に潜む、あるものを感じずにはいられなかったのです。

だいたい、この事件、動機が今ひとつはつきりしませんでした。彼女のような、大胆かつ細心な神経をもち、15年にもわたって警察の捜査を煙に巻くほどのしたたかな女と、犯した犯罪の短絡性が、どうにもストレートには結びつかなかったのです。彼女の罪状は強盗殺人でした。無期懲役または死刑にあたる重罪です。わずか100万円程度の預金通帳欲しさの犯行と考え

るとあまりにも算盤勘定が合いません。私は和子と被害者Yさんの間に、二人しか知りえない特別な関係があったのではないかと直感していたのです。

ホモセクシャル映画

福田和子逮捕の翌年の1998年(平成10年)、フランスを代表する美男俳優のアラン・ドロンが引退を宣言します。この何の関連性もないだろう二人の人物が、私の中では、おぼろげにひとつにつながっていました。

彼の作品を通してフランス映画の洗礼を受けた私には、やはり引退の報は感慨深いものがありました。好きな作品は沢山ありますが、あえて一本挙げるならば、やはり彼の出生作でもある『太陽がいつばい』(60年)です。

お話はいたってシンプルです。金持ちのドラ息子フィリップ(モーリス・ロネ)と彼の親友で、彼に何かといじめられながらも従者の如く付き添う美貌の貧乏青年トム(ドロン)、これにフィリップの恋人マルジュ(マリー・ラフォレ)を加えた3人が地中海をヨットでクルージングします。美しい恋人を見せつけながら、ことあるごとにトムに屈辱的な仕打ちをするフィリップ。トムの心に次第に殺意が芽生えます。トムの仕掛けでフィリップと痴話げんかを起こ

したマルジュがヨットを降り、フィリップと二人きりになることに成功したトムはついに洋上で彼を刺殺し、その死体を海に捨ててしまうのです。

陸に戻ったトムは、フィリップの筆跡を真似、偽の身分証明書を作って、(つまりフィリップになりすまして)財産を奪います。そして、恋人を失い(事實はトムに殺され)、傷心にあつたマルジュのハートまでゲットするのです。…この先は映画をごらんください。

私は、ドロンの引退宣言に合わせて、『福田和子はアラン・ドロンだった』と題する原稿用紙にして5枚程度の短いエッセイを「GOKUHI」(1998年6月号)という雑誌に寄稿しました。手前味噌の感もありますが、ここに少し引用させていただきます。

《かの淀川サンに言わせると、この映画のドロンとロネは潜在的なホモ関係にあるという。そう言われてみると、暴君な若殿にマゾヒスティックなまでに仕えるドロンの、雨に濡れた子犬のような瞳、そこに宿る卑屈な色づばさが理解できる。子供のころにこの作品を観たときは、奇異にしか映らなかつた、ロネのシャツを着たドロンが鏡の中の自分にキスするシーンの意味するところも……》《ドロンはなぜロネを殺したのか。財産？ 女？ それも二次的な理由に過ぎない。》《無知で無力な「彼」にとつて「彼」になることが、唯一の愛の具現だったのだ。なるほど、「彼」はラフォレ演じるマルジュを愛していたが、それは「彼」の女だったから。その意味ではシャツと何ら変わるものではない。》

ここでいう、「彼」とはドロン扮するトム、「彼」はロネが演じるフィリップを指します。

「淀川サン」というのは説明するまでもなく、映画解説のパイオニアであった映画評論家の淀川長治氏。氏は日本の評論家の中でもいち早く、そして、おそらく唯一、この映画のホモセクシャルな要素を指摘された人物です。私も淀川サンのこの指摘がなければ、福田和子の事件を単なる小金目当ての愚かな犯罪としか認識できなかつたかもしれませぬ。

私はエッセイをこの言葉で締めました。

《逃亡の果てに、幾度も整形手術を繰り返していた福田和子。彼女が本当になりたかつた顔は、きつとたぶん……》

発表媒体がアダルト系男性誌だったこともあり、私の拙いエッセイの内容について他メディアが拾い上げてくれるようなこともありませんでした。その後の公判(2000年8月)で和子の弁護士から、彼女と被害者Yさんが同性愛の関係にあったことが明らかにされたときは、「やはりそうか」と一人悦に入つたものです。それと前後するように、写真週刊誌等で、和子が整形をする際、無意識のうちにYさんの顔に似せているなどの指摘もあり、それを読んだときはさすがにちよつと怖いくらいでした。

『太陽がいつぱい』の主人公トムも現実の福田和子も、殺害した相手に対し、同性愛の感情とそれに伴う同化願望をもっていました。和子の、被害者の装飾品はおろか下着まで身につけるといった一見異様な行為も、先に紹介したトムがフィリップのシャツを着る鏡のシーンと符号するのです。フィリップが何気なしに見せつける白亜のヨットも可憐な恋人も坊ちゃん育ちら

しい天真な傲慢さも、トムにはひたすらまぶしいものに映ったに違いありません。まるで地中海の太陽のように。

福田和子のホステス時代の写真、つまり整形前の写真を見る限り、お世辞にも美人とは程遠い顔立ちで、しかも既に4人の子持ちでしたから、体の線などもだいぶくたびれていたことでしょう。反面、いわゆる男好きのする甘え上手、話上手のタイプだったらしく、彼女目当てで店に来る客も多かったといえます。田舎町のクラブということもありますが、お店では、ナンパ12か3、あたりのポジションは常に確保していたようです。現に当時、夫の他に愛人がいたのは先に記したとおりですし、逃亡中も何人かの男と同棲しています。金沢市では老舗和菓子屋の主人の内妻に納まり、2年8ヶ月の間、店を切り盛りしていたといえますから、人当たりによさも伺えます。ホステスとしての彼女に欠けているのは、「美貌」だけでした。一方、殺された同僚Yさんは誰もが認める美人だったといえます。

日本というシャツを着た韓国

韓国の日本擬態行為、ありていに言うところの「なりすまし行為」も福田和子や「太陽がいつぱい」のトムのケースのような、性愛的同化願望という視点から見るとよく理解できるのではないかと思えます。

このタイプの同化願望のベクトルは通常、下位の者から上位の者へ、持たざる者から持てる者へと向かいます。下位の者が上位にいる者に自己を投影し、それを振りどころに、上位者に自分を似せていくことから始まるのです。運動部の先輩後輩など、擬似同性愛的関係ではよくあることです。しかし、いずれ自分と相手とは別人格でしかないことを悟り、自然と再分離（異化）していきます。「先輩は先輩、俺は俺」です。と同時に擬似同性愛関係も解消され、自然と異性愛に関心が移行していきます。

しかし、中にはこの分離が上手くいかず、同化を進めるあまり、性愛の対象である上位者になり代わろうとする衝動が芽生えることがあります。性愛対象者と自己の境界がないという意味では、多分に自己愛的な性衝動ともいえるかもしれません。韓国の「日本なりすまし行為」はまさにこれです。

なぜ、韓国が、日本のブランド・イメージに擬態するのか。商売がやりやすいからという現実的な問題だけでは決してその答えを導くことはできません。日本というシャツ（下着）を着ることによって、鏡の中の自分に「日本」を見つけたためです。鏡の中の「日本」と接吻しているのです。剣道や茶道のルーツを捏造するのも、根は同じといえます。彼らにとって、剣道や茶道は、愛するフィリップが所有する白亜のヨットや可憐な美女に他なりません。韓国が欲しいのは、あくまで世界に認められた「日本の」剣道や茶道であって、単に、「剣術を競技化

した武道」や「茶を点てる作法」では意味がないのです。

幼稚園児ぐらゐの小さな子供が、「○○ちゃんもつているから欲しい」という理由でおもちゃをねだるとき、それは意識の中で、「○○ちゃん」と同化したという願望が働いているのです。そういう子はたとえば、お絵かきの時間でも、○○ちゃんの絵を真似たそっくりな絵を描きます。

二番手のジレンマ

韓国の最終目的は「日本に取って代わる」ことです。「なりすまし」はその段階に過ぎません。しかし、「なりすまし」が上手くいけばいくほど、冒頭紹介したように、サムスンを日本企業と思う外国人も多くなるといったような、彼らにとつては笑えない事態も生じます。

「ナンバー・ワンよりオンリー・ワン」という歌の文句がありますが、歴史上、韓国・朝鮮は、一度たりともあらゆる分野でナンバー・ワンになったこともなく、さりとてオンリー・ワンであると胸を張れる分野ももつことはできませんでした。韓国は常に東アジアのナンバー2に甘んじ、時にそれを誇り、時に卑下してきました。

小中華思想から、支那を文化の父（ナンバー1）、自国を長男（ナンバー2）とし、日本を次男（ナンバー3）と見下してきましたし、大陸、半島、島国という彼らだけに通用する序列でもそうです。一方、近代化ではアジアで日本に次ぐ2番目で、つまりナンバー2。彼らがこゝとさら「先進国」という言葉に固執するのも、アジアで最初の先進国・日本を意識してのもの

です。彼らのさらなる悲喜劇は、ナンバー1である日本が存在しなければ、自分たちがナンバー1になつていたはずだ、あるいは日本が無くなつてしまえば、自分たちは繰り上げナンバー1になれるに違いないという美しい錯覚のもとに生きていることです。台湾出身の経済史家・黄文雄氏は、もし日本による朝鮮併合と戦後のさまざまな支援がなかったならば、韓国の現在の国力はせいぜいパングラデシユ程度であつたろうとしています。つまり、日本があつたからこそ、彼らはナンバー2でもいられるということになります。これが、韓国が抱え続ける「二番手のジレンマ」です。「なり代わり」は、このジレンマの解消行為でもあるのです。

ウリに見る韓国人の同化能力

韓国人は他者との同化・同調能力に長^たけている民族といえます。一度仲良くなれば、他者との境界が限りなく曖昧になるのが韓国社会です。韓国の大学キャンパスを巡ると、それこそ

イでもないのに、男の子同士で手をつないで歩いたり、芝生で膝枕する姿をよく見かけるといいます。

先に、福田和子が同僚の下着まで身につけていたという話を書きましたが、韓国人がそれを耳にしたとしても別段奇異なことと思わなかったでしょう。韓国では、友人間でパンツや歯ブラシを共有することはごく普通のことなのです。留学などで韓国人学生と部屋をシェアした日本人学生が困惑するのがこの点です。カナダに留学経験のある知人の娘さんの話ですが、同室の韓国人女子大生が彼女の服や靴を勝手に拝借することが続いたので、やんわりと苦情を言ったら、「友だちと思っていたのに！」と、逆に憤慨されたとのことでした。皮膚と皮膚、体液と体液で直接間接的につながってこそ「真の友人」を実感できるのです。

韓国人の人間関係を構成する特徴として、よく取り上げられるのが、ウリとナムという概念です。本来「われわれ」を意味する「ウリ」ですが、この場合は「内輪」というふうに訳すとわかりやすいかもしれません。自分を中心に家族、血族、本貫、ほんがん地縁、友人、学閥と、さまざまに「ウリ」が構成されます。その外側がナムです。てっとりばやく翻訳すれば、ナムは「赤の他人」ですが、ニュアンス的にはもっと排外的な響きがあります。

韓国人と少し仲良くなって、相手から「ウリ」と認識されると、精神的に同化したものと見なされるようです。自分と相手の自我の境界がはなはだ曖昧になり、際限なく甘え、依存し合う関係になります。自我を共有するのですから、下着や歯ブラシを共有することなどなんの不

思議でもないのです。

幼児は母親を自分と同化した存在と認識し安心します。自分と母親を同一の人格と考えるのです。したがって、自分と母親を引き剥がそうとする存在を敵視します。父親に対してそれを感じるのが、いわゆるエディプス・コンプレックスです。

もう少し成長し、母親と異化が完成した年齢では、先にも記したとおり、仲のいい「○○ちゃん」への同化が起こります。韓国人はここから一歩も二歩も進んで「ウリ」という枠内での同化が起こるのです。

韓国人は「情の民族」を自認し、「日本人は情が薄い」などといいますが、この場合の「情」は、同化の度合いを意味します。「情が薄い」とはすなわち、同化能力が弱いということです。前出の知人の娘さんは、韓国人のルームメイトからすれば、さぞや「情の薄い」人間と思われることでしょう。

ウリと群魂

Naver 日韓翻訳掲示板があったころ、私もよく覗いておりましたし、何度か書き込みをしたこともあります。私の韓国への興味はその体験から始まったといっても過言ではありません。

驚いたのは、韓国人の思考や日本人の書き込みに対するリアクションが、面白いほどに類型的だったことです。あれは単に洗脳教育のたまものでなく、同化した韓国人の見識だったのでしよう。こと対日本になると、立場や年齢を超え、いともたやすく「ウリ」を形成してしまうようでした。

これは神秘学の領域の言葉ですが、メダカや鯛イワシといった群を形成する小動物は個体としての意志とは別に群としての意志をもっていると考え、これを群魂グループソウルといえます。たとえば、鯛が捕食者である中型魚に追われて群を割つても、また自然と群を形成するのは、群魂の働きだそうです。もちろん、生物学上確立された学説ではなく一種の仮説に過ぎませんが、この仮説を韓国人に当てはめると容易に理解できるといいうのも面白いところです。つまり、韓国人にとって、この群魂にあたるのがウリ意識ということになります。

メダカも鯛も単体では実に脆弱ぜいじやくな魚ですが、群による意志をもつことで、過酷な自然界の中で強大な捕食者に伍してきました。歴史的地政学的に見て、常に強国に脅かされてきた朝鮮民族にとっては、同化もまた生き抜くため武器だったのかもしれない。

ついでに言えば、弱い生き物が強い生き物に擬態することも自然界ではよくあることです。ある蛾の幼虫は一對の眼状紋（目のような模様）によって背中全体をマムシの頭部に見せて、天敵である鳥類からの捕食を逃れようとします。朝鮮民族の民族的特徴でもある事大主義もこの観点から分析してみると興味深いかもしれません。

ナムと差別意識

ウリ同士ならば、たとえトゲ一本刺さつても、まるで痛みを共有するかのように心配、同情はなほだしくは一緒に苦しんでくれるのです。特に韓国人は、痛み、悲しみ、恨みといった負の感情における共感能力に優れた民族といつていいでしょう。個体の苦痛を全体（ウリ）の苦痛として感受することができるのです。

その一方、ナムと見なした相手には、冷淡なほど無関心な態度を示します。金文学氏と金明学氏の共著『韓国民に告ぐ！』（祥伝社）によると、韓国には「ナムなら死のうと生きようと」という言葉があるそうです。たとえば、韓国では道で人とぶつかつても平気で行き過ぎていきますが、それはぶつかつた相手が所詮ナムだからです。

《韓国のはなほだしい「差別意識」も結局、この「ウリ＝身内」と、ウリでない「ナム＝よそもの」に対する差別に起因するのである。かの悪名高い地域差別は、ウリではない「ナム」に対する極端な不信と蔑視以外の何物でもない。ウリの領域ではないナムの領域で暮らす人だから、不信感をもつても差別してもかまわないという意識が先立つわけだ。たとえば全羅道は慶尚道のウリではないから、いわれのない差別も極めて当然と見なされるわけである。》（金文学・金明学著『韓国民に告ぐ！』祥伝社黄金文庫）

ここでは全羅道差別の例が出てきましたが、済州島出身者も一般的韓国人の感覚ではナムに

入ります。在日韓国朝鮮人も、満州の朝鮮族も基本的にナムあつかいです。

韓国から見た日本はむろんナムに他なりません、ある部分ではウリでもあります。韓国に観光へ行つて、「この国のどこが反日なの？」と驚くほどの歓待を受け、人々の親切や人情に触れて帰ってくる日本人も少なくありません。その人たちが韓国国内でのすさまじいまでの全羅道差別、済州島差別の話を目にすればさらに驚くことでしょう。もちろん、ケース・バイ・ケースですが、全羅道、済州島出身者やそれらをルーツとする在日同胞よりも、日本人が上位に置かれることも珍しくないので。

未分化の愛

しかし、彼らのいうウリというのは、単なる仲間意識や共同体を超えた、彼らだけが了解する自我の同一化のことですから、当然日本人の理解が及ばない領界にあります。下着や歯ブラシを共有することに抵抗感を示す日本人に、いきおい「薄情」「裏切られた」という感情を抱くことになるのです。はなはだしくは、日本人は口先では友好を説きながら、内心はわれわれをバカにしているのだと解します。

嫌いなはずの日本から技術支援をしてもらつて当然といった態度でいられるのも、韓国人が無意識のうちに日本にウリ意識を求めている証拠です。ただし、この場合、ウリに入れてもらいたがっているのはあくまで日本の方、でなければなりません。なぜなら、同化は下位が上位に求めるものであつて、韓国が日本の下位にあるということは、彼らの神学上、認めるわけにはいかないからです。

韓国人はよく「日本人が（韓国に）無関心なのが一番腹が立つ」と言いますが、そもそも「ナム」の関係が前提なら、無視・無関心に腹を立てる必要がありません。その意味では日本を「ウリ」だと思いたいのです。というか、今言つたように、「日本がウリに入れてほしがっている」と思いたいという方がより正確かもしれません。

韓国が何かにつけ、日本の足を引っ張つたり、さまざまな形でわれわれの神経を逆撫でしてくるのも、好きな同級生に振り向いてほしくてわざと意地悪をする小学生の心理に近いものがあります。好きな子の上履きを隠して、そつと物陰から様子を見ているアレです。当然、そんなことをすれば、相手には嫌われるのですが、彼（女）にとつては、その「嫌われること」が相手との関係性になってくるのです。無関心でいられるよりは、百倍も相手とつながっているという安心感が得られるのです。これは、まだ恋愛というものを認識できていない未分化の感情といえます。

何度も言いますが、韓国は決して日本が嫌いなわけではありません。同化したいほど好きなのです。未分化な愛情は屈折した形を取るので、日本人は往々にして韓国の反日的な態度ばかり

第2章 のたうちまわる愛

COMPAQ

최신아썬플러기라!

신속한 업무처리
최고의 성능
최고의 가격
최고의 서비스
최고의 보안
최고의 유연성
최고의 확장성
최고의 호환성
최고의 안정성
최고의 신뢰성

신속한 업무처리
최고의 성능
최고의 가격
최고의 서비스
최고의 보안
최고의 유연성
최고의 확장성
최고의 호환성
최고의 안정성
최고의 신뢰성

컴팩
프린터

価格を安くするのは、コンパックという高性能コンピュータ、メーカーの広告に表れた姿。

が目につくのです。
このよじれた心の糸をほどく術は日本にはありません。韓国の自覚に期待するしかないのです。隠した上履きがどこにあるのかを知っているのは韓国の方なのですから。